

Vol.61 August 2007

平成19年8月13日発行・第61巻8号 毎月1回発行  
定価2,200円(7月31日) 広告料特別扱承認第3090号  
昭和24年4月14日 第1種郵便物認可

# 近代建築

# Contemporary Architecture

# 8

## 【特集】 学校づくり、次なるステージ

監修 長澤 悟

2 0 0 7

# 神戸夙川学院大学

神戸市中央区  
設計・監理 竹中工務店  
施工 竹中工務店



正面ファサード 緩やかに上昇するアプローチとピロティ

## ■新しい生命の船出■

### 歴史的観光都市と新しい大学の出会い

当大学は、創立127年の歴史を持つ学校法人夙川学院初の男女共学4年制大学である。観光文化学部が設置され、21世紀の基幹産業として期待される観光のプロを育成する教育機関として、歴史的観光都市神戸に開学した。神戸市や隣接2大学との連携により、各キャンパスや神戸港に面するプロムナードとの一体的整備を行い、\*みなと神戸に新しい魅力を付与する景観形成にも貢献するものとなった。

### 配設計画と全体構想

敷地は東西に長く、海へ向かって誘導するような強い軸性を持つ。この軸性に、キャンパスの背骨となるキャニオンと呼ぶオープンスペースを重ね、ここからすべての空間が展開していく構成とした。一期工事では、キャニオンを挟んで北にアリーナ棟、南に本棟を配置し、内部空間がキャニオンとの空間的連続性を持ちながら上昇していく合理的かつ機能的な施設構成とした。引き続き二期校舎がこの7月に完成し、さらに三期工事を経て、敷地最西端への五周年記念棟の建設をもって全体構想が完成する。

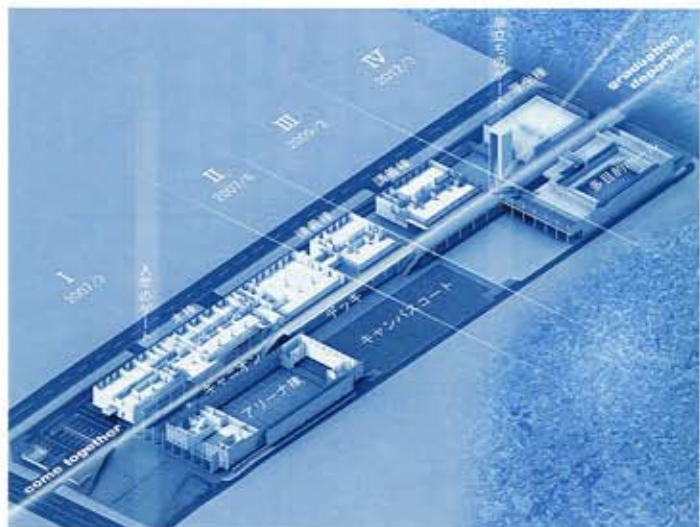
### 出会いと旅立ちの場の創造

アプローチを行くと、大きなピロティが迎える。大らかな庇には多くの若者の夢を迎え入れ、毅然として立つ列柱にはここから世界へ人材を送り出して行くのだという、開学にあたっての学院の強い意思を表現した。外装には純白の磁器質タイルを採用し、新しい大学、新しい学問分野、主役である学生たちのプリミティブな精神を表現した。白磁とも呼ばれる生地から白いタイルは、海の蒼、木々の碧、陽の光を吸収し、時の移ろいと共に刻々とその表情を変えていく。

キャニオンでは太陽の軌跡を生かし、光と影が空間に劇的な変化をもたらすよう配慮した。ここには1日1日の営みと、その積み重ねによって学生たちの魂が育まれていく4年間という、2つの時空間が織り合わされていくことになる。

三期工事では「旅立ちの

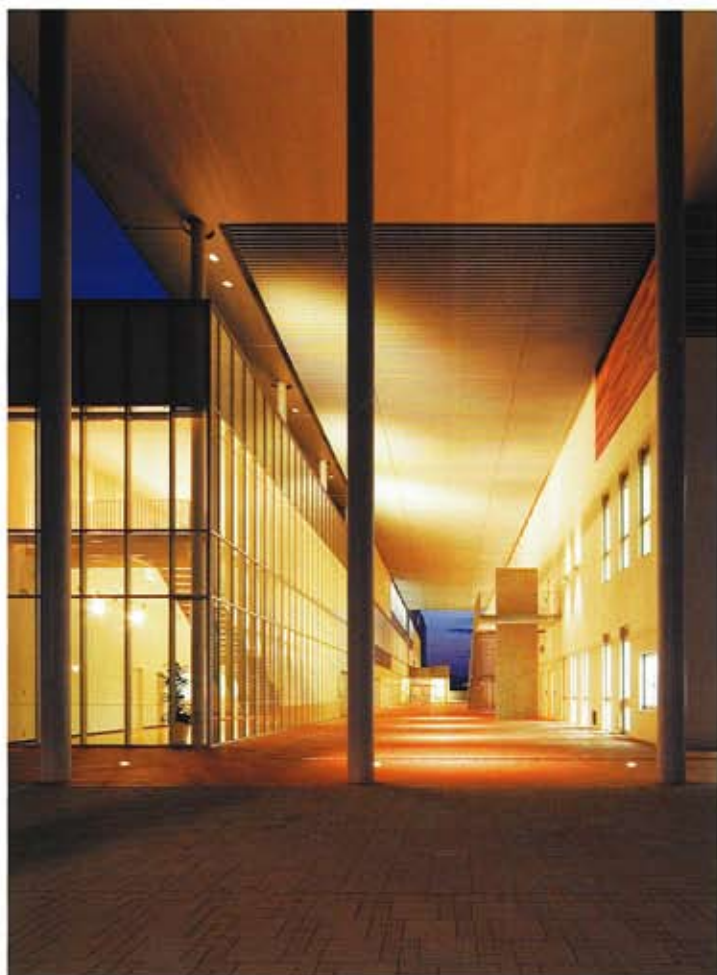
ゲート」が建設され、この純白の学び舎で育った輝かしい第1期生が旅立っていく。海の蒼と空の青が融けあう時間、夕陽に世界への旅立ちを思い描く時間、それら全てが新しい大学の教材となる。神戸港、六甲山を見渡し、南に神戸空港が控える絶好のロケーションの中、真の観光文化の担い手を育成する学び舎として、この純白のキャンパスが学生たちの夢を乗せて、世界への航海を続けていくことを願っている。（梅田善愛／竹中工務店）



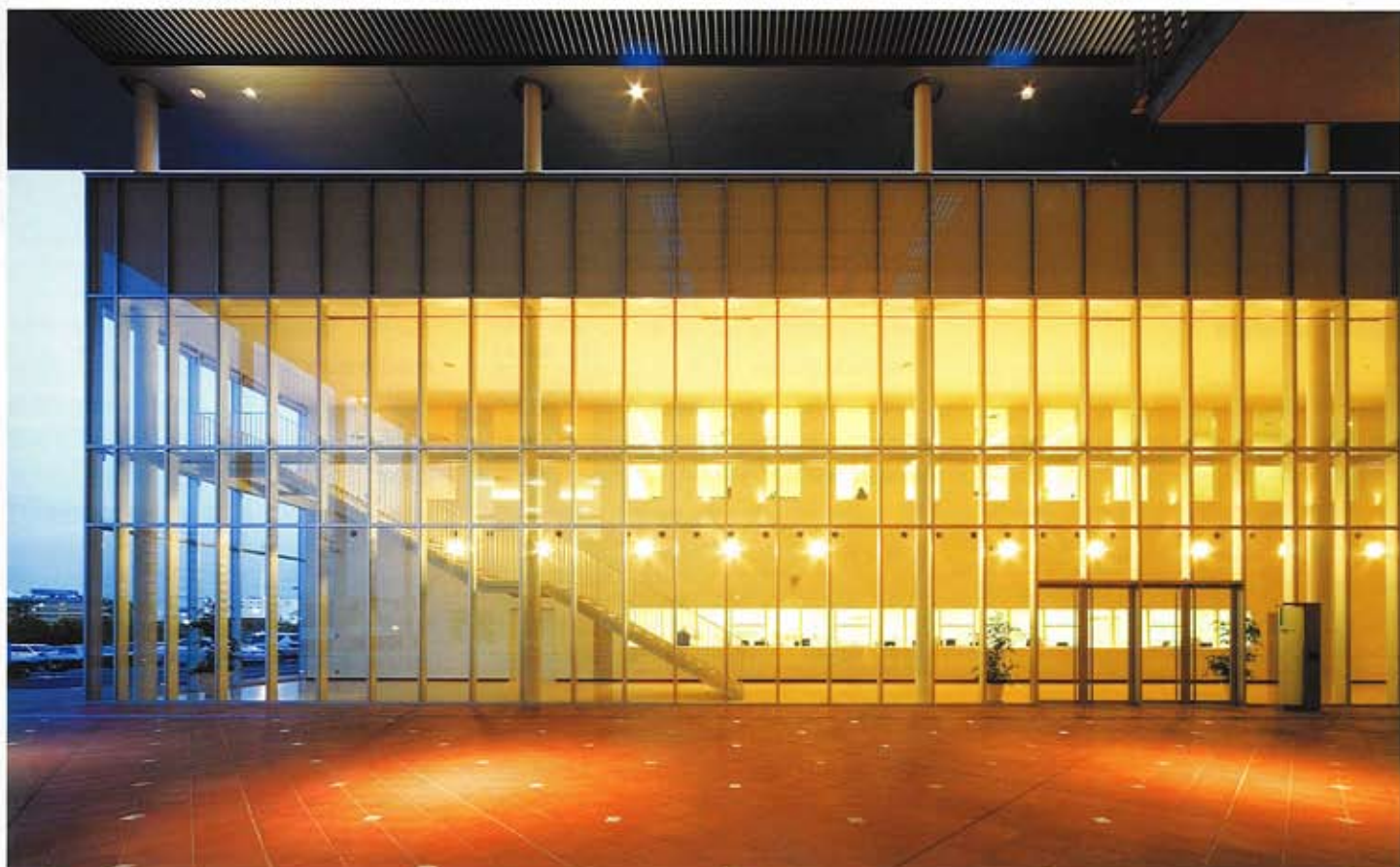
全体構想 光と旅立ちの軸に沿い順次発展していくキャンパス



キャニオン 高さ13mの列柱は直径400mmのPRC柱



キャニオンタ景 間接照明主体の照明計画



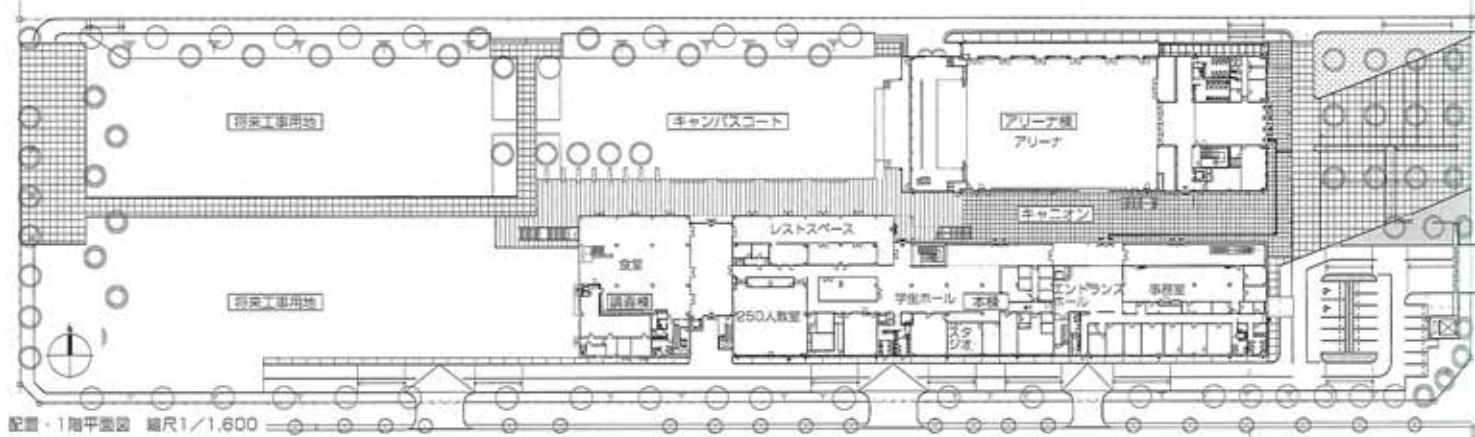
キャニオンと事務ホール コンクリート充填鋼管柱とガラスの皮膜による透明感溢れる境界面



1階学生ホール キャンオンに添い上昇する内部空間



3階講義ゾーンと4階教員ゾーンを繋ぐ吹抜 光が映えるシンプルな内部空間



配置・1階平面図 縮尺1/1,600

## ■豊かな空間の創造■

### 大切な一歩を祝して

時間を築いでいく空間、つまり教室や管理諸室などを除く非目的空間が豊かであることは、学生の感性を育てる空間の創造には欠かせない課題である。当キャンパスは堅実な事業計画に基づき段階的に整備されていくため、大切な一歩となる一期工事では、無駄のないシンプルなボリュームとゆとりある空間の再立を目指し、学生や教職員の一人ひとりが、ふとした瞬間に何かを想ったり、心を休めたりできるシーンを散りばめた。

### 大らかな空間を実現する構造

構造はSRC柱とS梁の構成で高機能・短工期を目指した。本棟では、耐力壁を外周とコア周辺に配置し、将来のプラン変更や内部機能の更新にフレ

キシブルに対応できるように配慮した。キャンオンや良好な眺望に接する北面にはコンクリート充填鋼管柱を採用し、内外空間の繋がりをより強調する透明性の高い境界面を形成した。こうして一定の光環境を得ることのできる北面を開放することで、隣接他大学との空間的連続性と六甲連山への眺望を確保しながら、環境負荷の軽減にも貢献している。

キャンパスのシンボルとなるキャンオンを覆う大屋根の鉄骨梁は、アリーナ棟から持ち出し本棟側で約200mmの可動巾を持ってすべり支承上で支持されている。これは、各棟の構造的性質の違いに配慮しながら、地震力に対して無理なく抵抗できる合理的なシステムである。

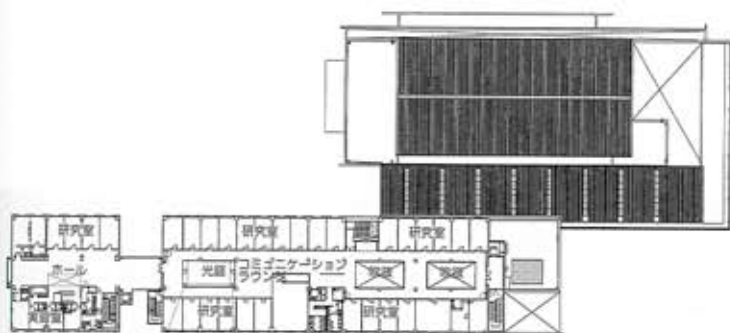
### 光りが学生を育む

昼間は自然光と影が織り成す時の流れを感じられ

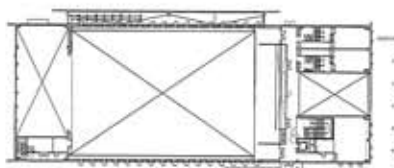
るように、夕刻からは照明により内包する空間の豊かさを表出する演出を心掛けた。照明は間接照明主体で、3,000から3,500ケルビン付近の色温度を中心に暖かく優しい灯りで統一した。光源選択は、ランニングコストと環境負荷の低減を意識し、長寿命、高効率、高演色性能を持つコンパクトメタルハライドランプやコンパクト蛍光灯を種類を絞り込み採用した。

自然光で時を刻み、道を示し、人工光で暖かく包み込み、安らぎを与える。観光文化学部でホスピタリティを学ぶ学生たちが、安らぎある光の実例を体感できる学校施設であると共に、新しい文教空間の光の実例として、ひとつのモデルケースと成り得る新鮮さと美しさを併せ持つ空間の完成を見ることができた。

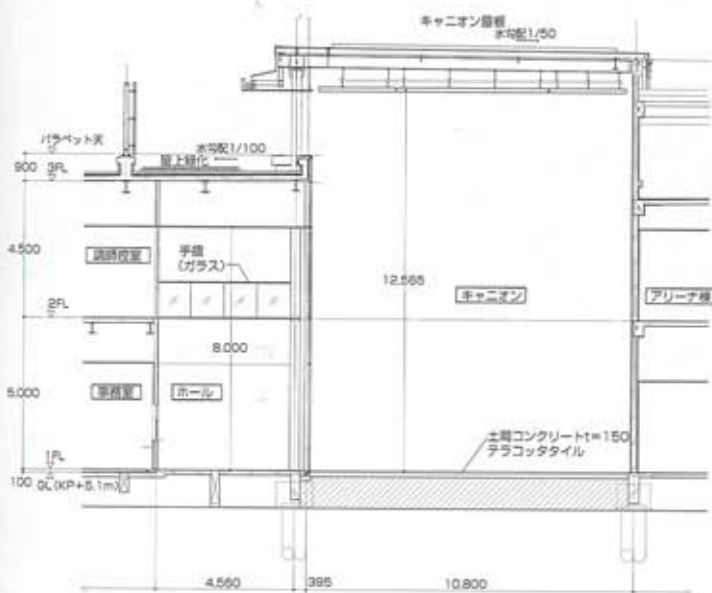
(梅田善愛/竹中工務店)



4階平面図



2階平面図



キャニオン断面詳細図 縮尺1/250

右上/キャニオン大層根柱貫通部 鉄骨梁の可動域で円形にくり貫いたアルミスバンドレル  
右下/キャニオン壁間 アルミルーバーを通して自然光が降り注ぐ



神戸夙川学院大学 データ

所在地 神戸市中央区港島1-3-11  
 主要用途 大学  
 建築主 学校法人 夙川学院  
 設計・監理 竹中工務店  
 担当/建築: 滝井利行、梅田善愛、窪田龍二 構造: 片山文士、島野幸弘、大野正人 設備: 中林 海、布上亮介、大原宗明 申請: 松浦 博  
 照明計画 スタイルマテック松本設計室 担当/松本浩作  
 施工 竹中工務店 担当/田中克己、森田真司  
 設計期間 2005年3月~2006年3月  
 工事期間 2006年3月~2007年3月  
 [建築概要]  
 敷地面積 25,202.73㎡  
 建築面積 6,233.50㎡  
 延床面積 12,598.80㎡  
 建ぺい率 24.73% (許容60%)  
 容積率 49.99% (許容200%)  
 構造規模 SRC造、S造 地上4階  
 地域地区 準工業地域、神戸海上新都心南土地区画整理事業

[学校施設]

学部構成 観光文化学部 観光文化学科  
 学生数 208名 (初年度入学生)  
 教職員数 47名 (専任教職員)  
 [主な外部仕上げ]  
 屋根 アスファルト断熱防水 一部屋上緑化  
 外壁 50ニ丁掛モザイクタイル  
 建具 アルミサッシュ電着着色  
 外構 300角テラコッタタイル  
 [主な内部仕上げ]  
 1階学生ホール 床/天然リノリウム 壁/天井/EP-II塗装  
 2階図書館 床/タイルカーペット 壁/ビニルクロス 天井/岩綿吸音板  
 各階教室 床/タイルカーペット 壁/EP-II塗装 天井/岩綿吸音板  
 アリーナ 床/フローリング (カバクラ) 壁/ガラス  
 スクールボード+木リブ 天井/岩綿吸音板

撮影/母倉知樹

協力会社

タイル・造作工事	丸与タイル
骨・土工事・掘削工事・圧入工事	乾 建設
コンクリート工事	河合産業
型枠工事	タカシマ
鉄筋工事	松尾工務店
鉄骨工事	本岡建設工業
金属工事	藤本鉄工
ガラス工事	伊藤硝子産業
製鉄建具工事	兵庫機工
シャッター工事	三和シャッター工業
金属屋根工事	淀川製鋼所
ノスリフ・組・組手組・建具	ナカ工業
耐火塗装工事	エスケー化研
内装工事	神戸インテリアセンター
外構工事	木下工業
造園工事	塚本造園工務所
厨房設備	フジマック
昇降機設備工事	萬世電機
トランス納入	立花エレテック
照明器具	コイズミ照明
照明器具	ニッポ電機
鉄骨溶接部第三者検査	エース・エンジニアリング